

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：82602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12594

研究課題名（和文）子育て期の家族エンパワメント尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

研究課題名（英文）Development of a Family Empowerment Scale for families raising children and examine its reliability and validity.

研究代表者

佐藤 美樹 (SATO, Miki)

国立保健医療科学院・その他部局等・上席主任研究官

研究者番号：90749540

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：【目的】本研究の目的は、子育て期の家族のエンパワメントの状況や変化を自己評価するための家族エンパワメント尺度を開発することである。【方法】文献検討と専門家への面接調査に基づき、尺度原案を作成した。次いで1～3歳児を持つ親を対象に質問調査を実施し、尺度の妥当性と信頼性を検証した。【結果】26項目、5つの下位因子「家族との関係性」、「育児の効力感」、「地域とのつながり」、「親役割達成感」、「サービスの認知と活用」からなることが確認された。【結論】本研究では、子育て期の家族エンパワメントの状態を測定するための妥当性および信頼性を有する尺度が開発された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域においては子育て支援サービスの拡大にもかかわらず、必要な支援に結びつかず地域で孤立した子育て家庭が数多く生じており、子どもを取り巻く地域の課題は深刻化している。支援者には個人と家族の発達課題を乗り越える力を見極め、時間経過の中でアセスメントをしていく視点が必要である。本尺度の開発によって、まず子育て期の家族エンパワメントを客観的に数量化できることがあげられる。次に、家族の発達段階の節目で活用することで、家族の現況に合わせた支援方法の検討が可能となることが期待できる。さらに、わが国の育児の現状にあった家族エンパワメントの評価に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：【Purpose】 The purpose of this study was to develop a scale to self-evaluate the status and changes in family empowerment during the parenting years. 【Methods】 To develop the scale, a draft scale was created, and a questionnaire survey was administered to parents with children aged 1-3 years to test the validity and reliability of the scale. 【Results】 Factor analysis revealed that the optimum solution that can interpret each factor is obtained with 5 subfactors and 26 question items. It was confirmed that the 5 subfactors were “relationships within the family,” “sense of efficacy with regard to parenting,” “relationships with the community,” “sense of achievement as a parent,” and “recognition and combined use of services.” 【Conclusion】 This study developed a valid and reliable scale to measure the state of family empowerment during the parenting years.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：エンパワメント 家族 親 育児 尺度開発

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 家族エンパワメントの必要性

わが国では少子化や核家族化の進行、近所づきあいや子どもを通じた付き合いの減少など地域のつながりが希薄化¹⁾、地域において育児中の家族を支える力が弱くなっている。健やか親子21や地域子育て支援施策などの虐待予防を含めた幅広い対策により子育ての社会化が進みつつあるが、身近な地域に相談相手がいないなど、子育て家庭の孤立した状況が見受けられる。このような状況は必ずしも個人や家族の問題だけではなく、変化する社会との関係が子育て中の親の孤立した状態を生み出し、孤独感の増大²⁾やサポートの欠如³⁾などが育児の問題に対処することが困難な親のパワーレスな状態を生み出す可能性がある。

家族には、家族自身の力で様々な状態を乗り越えていくことができる機能がある。しかし、現在では、その家族機能が希薄化し、そもそも持っていた家族の力が失われている状況がある。家族を対象とした研究では、家族がエンパワーしたときに健康問題をより効果的に対処できることが報告されている。子育て期において家族のエンパワメントが必要とされるのは、病気や子育て不安などで、家族の力で解決できない時等である。また、家族は家族の力で解決できない時は、支援者がコントロールするのではなく、家族が自分自身の力で家族の力を引き出せるような家族エンパワメントが必要となる。これらのことから、家族をエンパワメントする視点が必要である。

(2) 家族エンパワメントの評価

エンパワメントに関する研究は、1900年代に入り様々な領域でエンパワメント尺度の開発が行われている。測定する対象は患者・家族を対象とした研究、一般住民、看護師・保健師等の援助者に対する尺度の開発が試みられている。家族エンパワメントに関する研究では、Koren⁴⁾は、地域で情緒障害児を養育する家族のエンパワメントに関する概念枠組みを提示し、家族エンパワメント尺度を開発した。この家族エンパワメント尺度は家族、サービスシステム、コミュニティの3つのレベルにおいて、知識・表現・態度の3領域の質問項目で構成され、信頼性・妥当性が検証されている。しかし、この尺度は個人の状態や認識を測定するものであり、家族の相互作用や信頼を評価する項目が不足していた。わが国では、日本語版家族エンパワメント尺度が涌水⁵⁾によって翻訳され障害児を養育する家族に用いられている。家族エンパワメントは「家族が自分たちのおかれた状況に気づき、問題を自覚し、自分たちの生活の調整と改善を図る力をつけることを目指すこと」⁶⁾と定義されている。家族エンパワメントが生じる条件には、家族との相互尊敬、共に参加する関係／協働関係、信頼があげられている⁷⁾。しかし、この尺度は個人の状態や認識を測定するものであり、家族の相互作用や信頼を評価する項目が不足している。家族エンパワメントの評価には、子育て期の家族のセルフケア機能を見極め、家族エンパワメントの状況や過程を明らかにしていく必要がある。麻原⁸⁾は、個人のエンパワメントプロセスは、他者との相互作用によって生じるプロセスであり、個人が他者との相互作用により、個人が自身の問題だけでなく、集団及び地域の共通の問題に気づき、認識した課題解決のための方略も、他者との相互関係の中で学ぶ、としている。そのため、家族で相談して問題を解決することや家族のエンパワメントの状況や変化を自己評価するための家族エンパワメント尺度の開発が必要である。

今後、子育て期の家族および彼らを支援する保健師等が家族の発達段階の節目でエンパワメントの状況を把握し、効果的な支援方法を検討していく際に活用可能な測定用具が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、公衆衛生看護学領域においてエンパワメントという重要な概念に着目し、質的研究及び量的研究を基に子育て期の家族のエンパワメントの状況や変化を評価するための家族エンパワメント尺度を開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究1：尺度原案の作成

①文献検討による質問項目の抽出

子育て期の家族エンパワメントの構成概念を整理し暫定版尺度を作成するため国内外の文献を検討した。まずは、国内外の先行研究を以下の条件で抽出した。医学中央雑誌及び CiNii、PubMed、PsycINFO、CINAHLの5つのデータベースを用い、エンパワメント (empowerment)、家族 (family)、育児 (parenting) をキーワードとして会議録を除き、絞り込み条件を原著論文とし検索した。検索期間は1990年～2017年を設定し、タイトルと抄録にキーワードを含む文献を検索した。文献の採択基準は、a. 家族のエンパワメントおよび子育て期のエンパワメントについての記述がされていること、b. 看護、心理、社会福祉、公衆衛生の領域であること、c. 英語または日本語で記載されていることとした。キーワード検索により抽出した222件について、1次スクリーニングとして表題及び抄録の精読を行い、次いで2次スクリーニングとして本文の精読、追加の文献検討を行い候補となる文献を採択した。

質問項目の抽出手順は、まず文献検討により対象となった論文について、子育て期の家族エンパワメントにかかわる内容が記述されていると文献から読み取れる部分をアイテムプールとして取り出した。次に意味内容の類似性に基づき、カテゴリー化を行った。さらに家族エンパワメントを説明する仮説的な枠組みを作成し、子育て期の家族エンパワメント尺度（暫定版）を作成した。

②尺度原案の作成

文献検討により作成した暫定版尺度について、改良に向けた内容の過不足並びに妥当性を検討し、FES-P 原案を作成するため、地域看護学及び家族看護学を専門とする大学教員 5 名と行政機関に勤務している保健師 6 名の 2 つのグループにフォーカスグループインタビュー (FGI) を実施した。インタビュー内容は、暫定版尺度の改良に向けた内容の過不足ならびに内容妥当性に関する意見である。得られた意見により、家族エンパワメントに関する内容を精選して質問項目を検討した。

③尺度原案の表面妥当性の検討

尺度の表面妥当性を確保するため、さまざまな経験年数と専門領域を持つ看護職 15 名にプレテストを行い、回答における不具合や表現のわかりにくさ等について意見聞き、質問項目の表現等を修正した。最後に研究者間で修正を行った。

(2) 研究 2 : 幼児を持つ親の家族エンパワメントを測定する尺度 (Family Empowerment Scale for Parents with Toddlers、以下 FES-P) の妥当性・信頼性の検討

①調査 1 : FES-P の開発

調査対象は、全国の 1~3 歳児を持つ親 800 名 (男性 400 名、女性 400 名) とした。調査方法は、インターネットを活用した構成的質問調査を実施し、FES-P の妥当性と信頼性を検証した。

調査項目は、基本属性 (個人の要因、地域の要因)、FES-P 原案 60 項目、基準関連妥当性の検討に用いた外部基準変数 (Family APGER Score、育児感情尺度、特性的自己効力感尺度) である。

分析方法は、項目分析、外的基準との相関分析、探索的因子分析による構成概念の検討、共分散構造分析を用いた確認的因子分析によるモデルの作成、多母集団同時分析による男女の配置不変性の検討、基準関連妥当性の検討、信頼性の検討を実施した。共分散構造分析の適合度指標は、GFI (Goodness of Fit Index)、CFI (Comparative Fit Index)、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation)、AIC (Akaike Information Criterion) 等とした。

②調査 2 : 再テスト法

調査対象は、全国に在住する 1~3 歳児を持つ親、男性・女性それぞれ 100 名、計 200 名とした。調査方法は、調査 1 で開発した FES-P の安定性に関する再テスト信頼性を検討するため、インターネット調査会社のモニターを対象にインターネットを用いた構成的調査を実施した。再テスト法の 1 回目の調査から 2 回目の調査までの間隔は 2 週間とし、1 回目と 2 回目ともに回答のあったものを分析対象とした。

調査項目は、基本属性 (個人の要因、地域の要因)、FES-P26 項目を用いた。分析方法は、1 回目と 2 回目の FES-P 総得点および下位因子得点の級内相関係数を求め、再現性を検討した。

(3) 研究 3 : FES-P の因子間構造についての検討

FES-P の 5 つの因子間の構造について、共分散構造分析を用いて、パス係数、標準化推定値、適合度指標 (GFI、CFI、RMSEA 等) を確認しながらモデリング改良を繰り返し、最適モデルを探った。次に、母集団間の因子間構造の等質性を検討するため、性別の多母集団同時分析を行い、等値制約を置いたモデルを構成し、適合度指標 (CFI、RMSEA、AIC 等) をもとに、モデルの選択を行った。

4. 研究成果

(1) 研究 1 : 尺度原案の作成

①結果

文献検討の結果、英文 6 件、和文 6 件、計 12 件を採択した。調査対象は、障害児を持つ親 4 件、子育て中の親 3 件、子育て支援事業に参加している母親 3 件、健康診査来所の母親 2 件であった。子育て期の家族エンパワメントの構成概念は「家族の問題の認識と共有」、「育児情報の獲得や資源の活用」、「育児の効力感」、「親としての役割達成感」の 4 つの枠組みに分類された。「育児の効力感」と「親としての役割達成感」は個人的なエンパワメントに関する内容、「家族の問題の認識と共有」は家族との関係性に関する内容、「育児情報の獲得や資源の活用」は社会資源や地域の人々との関係に関する内容で構成されていた。

不足項目について、公衆衛生看護および地域看護の研究者等と検討を重ね、追加の文献検討、質問項目の修正を行い、FES-P 原案を作成した。さらに内容妥当性の検討を行い、本研究における幼児を持つ親の家族エンパワメントとは、「親が育児上の問題に気づき、気づいた問題を他者と共有し、問題解決への意思決定、情報の獲得や資源の活用を通して、内発的に動機づけられ、家族で力を合わせて問題解決ができてきている状態である」と定義した。評価方法は、「かなり当てはまる (7 点) ~ 全く当てはまらない (1 点)」の 7 件法のリッカート方式とした。これらのプロセスにより、尺度原案は 60 項目となった。

②考察

内容妥当性の検討は、尺度原案作成の段階で複数の専門家による意見聴取・評価を得ることによって、各項目の適切性を確保することができた。今後の課題として、個人だけではなく、個人と家族や地域社会との関係性をエンパワメントの視点で多角的に捉えていく必要性が示唆された。子育て期の家族支援においては、家族の Powerless な状況について、親子のニーズ等にかかわる個人的な次元だけではなく、家族や他者との関係性、社会資源や地域の人々との関係なども含めた3つの次元で家族のエンパワメントを捉え、形成的視点でアセスメントできる指標の検討が必要である。

(2) 研究2：FES-Pの妥当性・信頼性の検討

①結果

回答の得られた825名（男性412名、女性413名）を分析対象とした。FES-P原案60項目の各質問項目の得点平均値は3.15～5.51点、標準偏差は1.17～1.85点であり、天井効果と床効果を示す項目はなかった。信頼性の検討では、60項目のCronbach's α 係数は.980であり、内的整合性を脅かす項目はなかった。

探索的因子分析による構成概念の検討を行い、36項目5因子の最適解を得た。抽出された5因子について、各因子を構成する質問項目の内容を解釈して、「家族との関係性」、「育児の効力感」、「地域とのつながり」、「親役割達成感」、「サービスの認知と活用」と命名した。次いで、探索的因子分析で得られた36項目のFES-Pの理論的構造を確認するために、各項目を観測変数、各因子を潜在変数としたモデルを設定し、確認的因子分析によるモデルの検討を行った。モデルの改良を行ったところ、36項目のうち10項目が削除され、5因子26項目からなるFES-Pが構築された。モデルの適合度は、GFI=.906、CFI=.951、RMSEA=.057であった。さらに、男性と女性における因子構造の配置不変性を検討するため、等値制約を課さない多母集団同時分析を行った。その結果、すべてのパス係数と共分散が有意であり、モデルの適合度はGFI=.878、CFI=.943、RMSEA=.044で適度な適合度が示された。FES-Pの男性と女性における配置不変性が確認された（図1は男性のみ示した）。

FES-P総得点と外的基準（Family APGER Score、育児感情尺度、特性的自己効力感尺度）との有意な相関（ $p < .001$ ）が認められた。また、Cronbach's α 係数は尺度全体で.96、下位因子では.85～.92であった。再テスト法による級内相関係数は、尺度全体で $r = .88$ 、下位因子では $r = .79 \sim .84$ であり、安定性と再現性が確保できた。

②考察

本研究では、26項目、5つの下位因子からなる一定の妥当性および信頼性を有するFES-Pが開発された。FES-P総得点及び5つの下位因子得点とFamily APGER Score、育児感情尺度、特性的自己効力感尺度との相関係数から、基準関連妥当性が確保されていると判断できた。5つの下位因子は相互に関連する構成概念であり、「育児の効力感」と「親役割達成感」は個人的なエンパワメントに関する項目、「家族との関係性」と「地域とのつながり」は他者との関係性に関する項目、「サービスの認知と活用」は社会資源に関する項目で構成されていた。

信頼性の検討は、内的整合性の確認と再テスト信頼性の検討により評価した。尺度全体および下位因子のCronbach's α 係数は.80以上あり、十分な内的整合性が確認された。再テスト法による級内相関係数により、安定性と再現性が確認できた。共分散構造分析の適合度は、CFI.90以上、RMSEA.05以下であることから、本尺度は適合度が良好であるといえ、一定程度の構成概念妥当性が確認された。

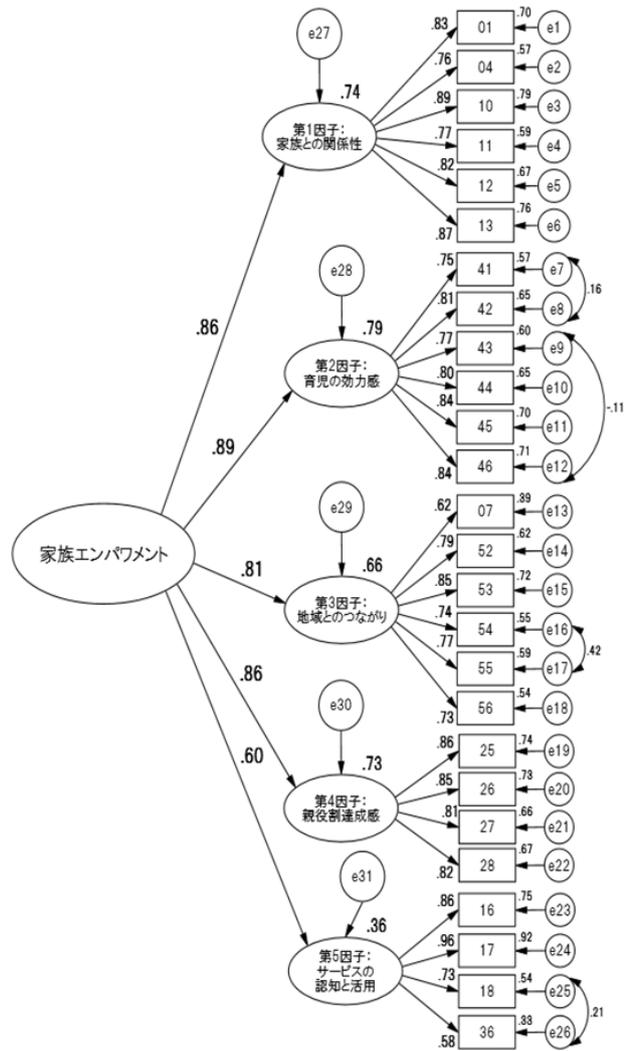


図1 幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の確認的因子分析モデル（男性）

(3) 研究3：FES-Pの因子間構造についての検討

①結果

FES-Pの5つの側面は、「家族との関係性」「育児の効力感」「サービスの認知と活用」「地域とのつながり」を経由し、「親役割達成感」に間接的に関連する構造モデルによって、66%が説明できることが示された。全体のモデルの適合度は、CFI=.952、RMSEA=.057であった。次に性別の多母集団同時分析を行った結果、CFI=.945、RMSEA=.042と良好な適合度が得られた(図2は女性のみ示した)。「家族との関係性」は、「育児の効力感」「サービスの認知と活用」「地域とのつながり」を高め、それが結果として「親役割達成感」の高さに繋がるということが明らかにされた。また「家族との関係性」と「サービスの認知と活用」は、「親役割達成感」を直接高めるのではなく、他の側面を間接的に経路して高められることが示唆された。

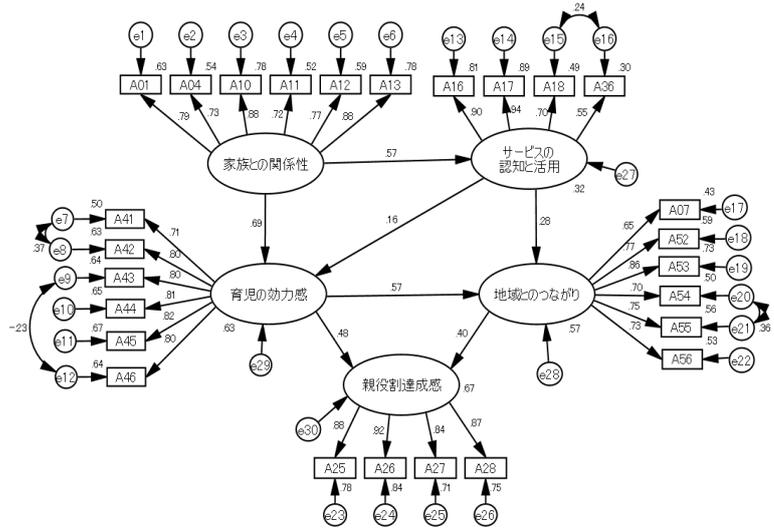


図2 幼児を持つ親の家族エンパワメントの因子間構造モデル(女性)

②考察

家族がエンパワメントした状態では、帰結として「親役割達成感」を高めることになると考えられる。家族エンパワメントを高めるためには、「家族との関係性」に着目し、「育児の効力感」「サービスの認知と活用」「地域とのつながり」の側面を強化することを通じて、「親役割達成感」を高める支援が効果的である可能性が示唆された。今後は、このモデルをアセスメントシートとして、乳幼児健康診査等の個別支援や、育児支援事業などの集団支援の場で活用できるようにしていくために、さらなる検討を積み重ね、精度を高めていくことが課題である。

FES-Pの看護実践での活用可能性として、多母集団同時分析によって、男性と女性における配置不変性が確認されたことから、母親だけではなく父親にも同じ質問項目で測定が可能なのである。

今後の課題としては、子育て支援に幅広く活用できるものにしていくために、乳幼児健康診査の評価指標として活用や育児相談等の面接場面での活用などを併用し、実証研究を積み重ね対象を拡大するとともに、尺度の質問項目の表現の修正や検討を重ね精度を高める必要がある。しかしながら、本研究では、幼児を持つ親の家族エンパワメントを測定する5つの概念を明らかにし、かつそれは父親・母親両者に活用可能なFES-Pを開発した点で独創性を有する研究であると考えられる。

【引用文献】

- 1) 内閣府. 平成19年度国民生活白書 つながりが築く豊かな国民生活. 東京:時事画報社. 2007; 1-8.
- 2) 佐藤美樹, 田高悦子, 有本梓. 都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因 乳幼児の年齢集団別の検討. 日本公衆衛生雑誌 2014;61(3):121-129.
- 3) 久保美紀. ソーシャルワークにおけるEmpowerment概念の検討—Powerとの関連を中心に—. ソーシャルワーク研究 1995;21:94-99.
- 4) Paul E.Koren. Measuring Empowerment in Families Whose Children Have Emotional Disabilities: A Brief Questionnaire. Rehabilitation Psychology 1992;37(4):305-321.
- 5) 涌水理恵, 藤岡寛他. 障害児を養育する家族のエンパワメント測定尺度 Family Empowerment Scale(FES)日本語版の開発. 厚生指標 2010;57(13):33-41.
- 6) 涌水理恵, 藤岡寛他. 発達障害児を養育する家族のエンパワメントに関連する要因の探索 Family Empowerment Scale 日本語版を用いて. 小児保健研究 2011;70(1):46-53.
- 7) 野嶋佐由美. エンパワメントに関する研究の動向と課題. 看護研究 1996;29(6):3-14.
- 2) 河合容子. エンパワメントの思想に立った子育て支援. 国立女性教育会館研究紀 1997:59-66.
- 8) 麻原きよみ. エンパワメントと保健師活動. 保健婦雑誌 2000;56:1120-1126.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐藤 美樹, 荒木田 美香子, 金子 仁子, 三輪 眞知子	4. 巻 67
2. 論文標題 幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 121 - 133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.67.2_121	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤 美樹, 荒木田 美香子, 金子 仁子, 三輪 眞知子
2. 発表標題 幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の開発
3. 学会等名 第78回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 美樹, 金子 仁子, 田口(袴田) 理恵, 荒木田 美香子, 三輪 眞知子
2. 発表標題 幼児を持つ親の家族エンパワメント尺度の因子間構造についての検討
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miki Sato Masako Kaneko Rie Hakamada-Taguchi
2. 発表標題 Examination of Inter-Factor Structure of Gender on Family Empowerment Scale for Parents with Toddlers
3. 学会等名 INTERNATIONAL COLLABORATION FOR COMMUNITY HEALTH NURING RESEARCH (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	金子 仁子 (KANEKO Masako) (40125919)	東京情報大学・看護学部・教授 (32515)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	荒木田 美香子 (ARAKIDA Mikako)		
研究 協力者	三輪 眞知子 (MIWA Machiko)		
研究 協力者	田口 理恵 (TAGUCHI Rie)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------